

《研究ノート》

集落から村落へ(1) —古代東国村落復元へのアプローチ—

田形孝一

(要旨)

近年の考古学成果のうち、東国の奈良・平安時代の集落について、そこで得た資料をもとに、古代東国村落復元にむけて考古学からのアプローチを試みる。とりあつかう資料は、本県における奈良・平安時代のごく一般的な集落跡で、下総国印旛郡船穂郷に属する。

今回は、現段階での着目点の抽出を行い、年月日を記載した土器の編年の位置づけと墨書された時期、祭祀関係のうち竈神祭祀と台地上のいわゆる「井戸状遺構」での祭祀、特殊な搬入土器の紹介などに関して検討を加えた。

本研究ノートは、最終的な目的である「東国古代村落復元」の「はじめの一歩」である。

はじめに

本研究ノートは、考古学からの集落研究を、文献史学の村落研究と同レベルに昇華するため、東国ではもっとも一般的な集落のひとつである印西市鳴神山遺跡¹⁾をモデルとし、整理作業を進めながら気がついた点をいくつか羅列し、現段階での検討を加えるものである。今回は、鳴神山遺跡からみつけた膨大な情報量のうち、年月日を記載した土器、村の祭祀、特殊な搬入土器について述べ、それ以外に現段階で気がついた点については、着目点の抽出を行っておく。

着目点の設定

鳴神山遺跡の整理作業を担当し、本格的な整理作業を進めていく過程で、補助員さんたちにある「おふれ」を出した。

『最近、鳴神山遺跡で「はやる」もの』

整理作業中に、気になることを羅列し、その項目ごとに遺跡の全体図にマークをつけて、データの収集を行うということが契機である。

さらにこの作業を進めていきながら、鳴神山遺跡の全体像を浮かび上がらせようというのが、当面の最終的な目的である。

最初から結論じみたことを言えば、気になる事

柄は、鳴神山遺跡では複数とか多数とか確認できるものもある。遺跡全体の様相をまとめることはこれからの作業であるが、決して特殊な事例でないことは断言できる。遺跡全体の特徴としても、千葉県では、各地で「ごく一般的に」²⁾に調査している「集落跡」である。

着目点の抽出は、遺構であり、遺物であり、遺跡全体、あるいは周辺の遺跡の調査例を含めてである。また、これらが多岐多様に、しかも密接に関連していくことはもちろんである。

以下、現段階での鳴神山遺跡での着目点を整理して掲げておく。

- ・竈神（竈祭祀）と竈の解体
- ・竈内の支脚（高さ調整・遺存の状態）
- ・竈構造で気になる点（前天井・うしろ天井・煙道口³⁾の存在）
- ・井戸の水神祭祀
- ・竪穴建物の地鎮祭
- ・竪穴建物の階段施設
- ・竪穴建物内の白色粘土の用途
- ・鍛冶工房の存在
- ・張りだす棚を持つ竪穴建物とその建物構造
- ・壁に巡らす溝の役割（板壁痕跡など）
- ・亀甲形の竪穴建物
- ・建物の柱の製材痕跡
- ・焼失建物（放火〔故意〕か、失火〔過失〕か）
- ・村のなかのお堂（3間×3間建物）
- ・村はずれのお坊さんの住まい
- ・鉄製品・文字資料が豊富な遺構
- ・気になる遺物（搬入品の土器・砥石・帯金具・文房具〈硯・水滴〉・仏具など）
- ・土器（特に杯類）の特徴的な割れ方

年月日を記載した土器

「□弘仁九年九月〔廿カ〕」の墨書土器⁴⁾は、鳴

神山遺跡II004堅穴建物⁵⁾から出土した。

第1図は鳴神山遺跡II004の出土遺物である。3がその墨書土器で、図に示したような破片であり、全体の約4分の1ほどの遺存である。遺存する部分の体部外面全体に、「弘」の前に文字の残画があるとすれば、8文字横位に連続して記されている。また底部外面の中央には、体部外面より幅広い筆で1文字が確認できる。また、未接合であるが、胎土や焼成から明らかに同一個体の小破片に、1文字の残画を認めた。

体部外面の文字については、年月日を記載し、横位に連続した多文字であることから、単に年月日だけではなく、これに続く記載があった可能性がある。

そこで、県内出土のほかの例を含めて検討を加えたい⁶⁾。第2図と第3図で、八千代市北海道遺跡D048号遺構⁷⁾、市原市稲荷台遺跡E地点37住居跡⁸⁾の出土例を掲げた。

北海道遺跡例は、底部内面に「承和五年二月[十カ] □」、体部内面に横位で「□ □」、体部外面から底部外面にかけて、正位で「人面」が描かれている。顎及び顎髭と耳の一部の表現部分が遺存する。

土器に描かれた「人面」については芝山町庄作遺跡出土例から、「在地の国神が表現され、在地にあつては多様な祭祀形態の中で活用された⁹⁾」と解釈されている。北海道遺跡例についても同様であるとすれば、その背景に何らかの祭祀行為が想起できる¹⁰⁾。

市原市稲荷台遺跡E地点例は、第3図の23がそうである。文字資料の図は公表されていないが、この遺物を実見した際¹¹⁾、年月日以外の文字も含めて観察することができた。口縁部を3か所ほど欠くものの、ほぼ完形の皿である。体部外面から底部外面にかけて「貞観十七年十一月廿四日」を「貞観十七年」と「十一月廿四日」とに分けて2段に記載する。体部外面にはこれ以外にも、ほぼ全面に正位で多文字の記載が確認できる。ただし連続する多文字ではなく、正位で記載しているため、それぞれは1文字ないし2文字である。全体的に墨が薄く、あるいは土器の欠損のため、釈文については不明な点が多い。報告した浅利幸一氏によると、「水」、「里」、「石」、「鳥」が読めるとのことである¹²⁾。また内面には、全面に「月」を内面の中

心に2か所、体部内面にも回転させるようにして、8か所繰り返し記載する。計10か所。「月」はすべて同筆と考えられる。浅利氏は「呪術的な色合いを漂わせている」と指摘している。

稲荷台遺跡E地点については、上総国府・国分寺に関連する官衙であり、みつかった祭祀跡とその特徴から、公的な祭祀を行った可能性が想定されている¹³⁾。このことと「貞観十七年十一月廿四日」やほかの複数の文字、10か所に「月」が書かれた土器とは、きわめて密接な関係があるのではなからうか。ここでもまた、その背景に祭祀行為が想起できる。

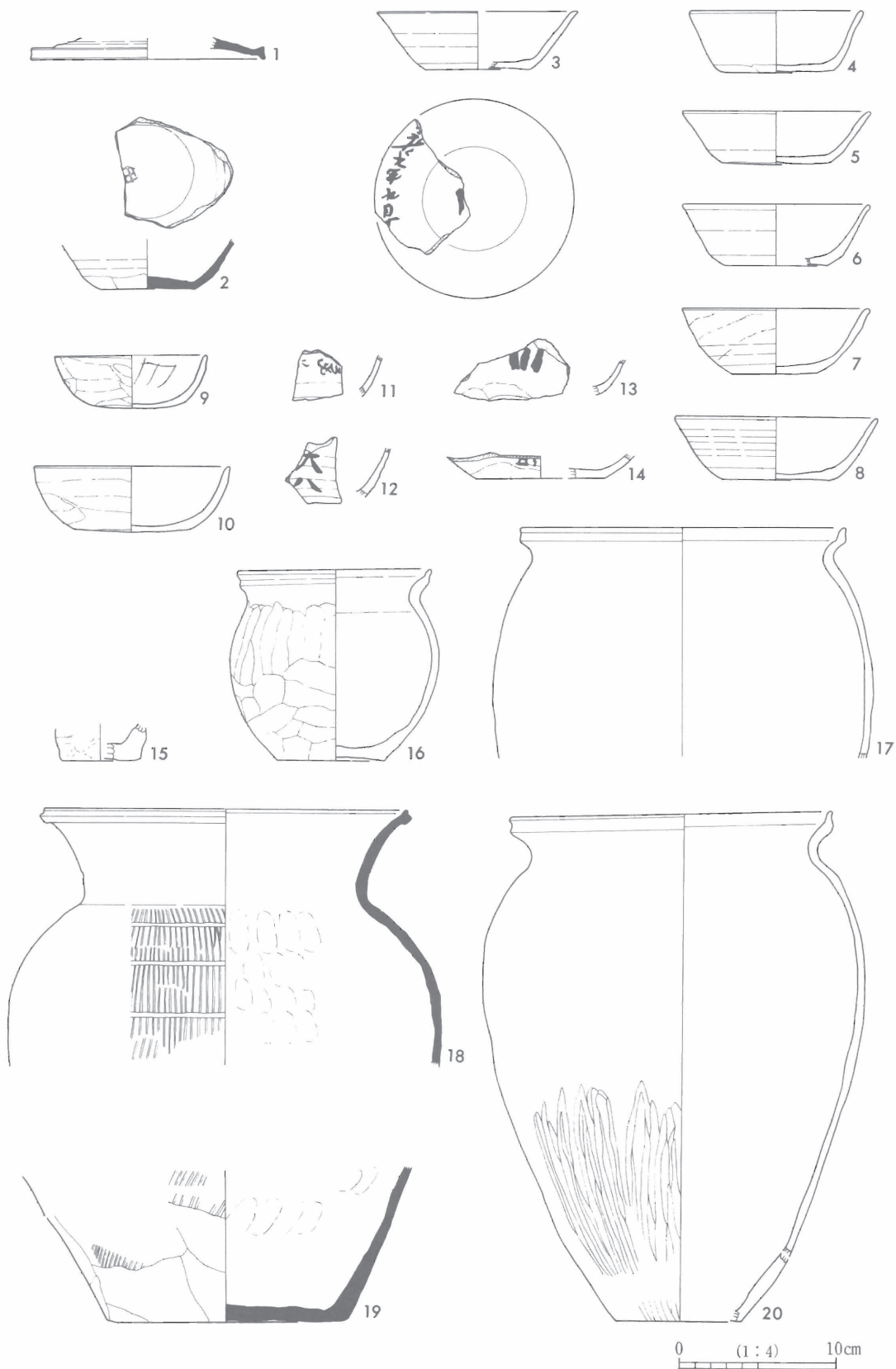
上記2例と鳴神山遺跡II004例を併せて考えると、鳴神山遺跡例では「人面」や祭祀的な文字の記載は確認できないものの、年月日を記載するという共通事項から、他の2例と同様に、背景に何らかの祭祀行為を想定することができる。

そこで、これらの年月日を記載した土器が墨書された時期について考えたい。

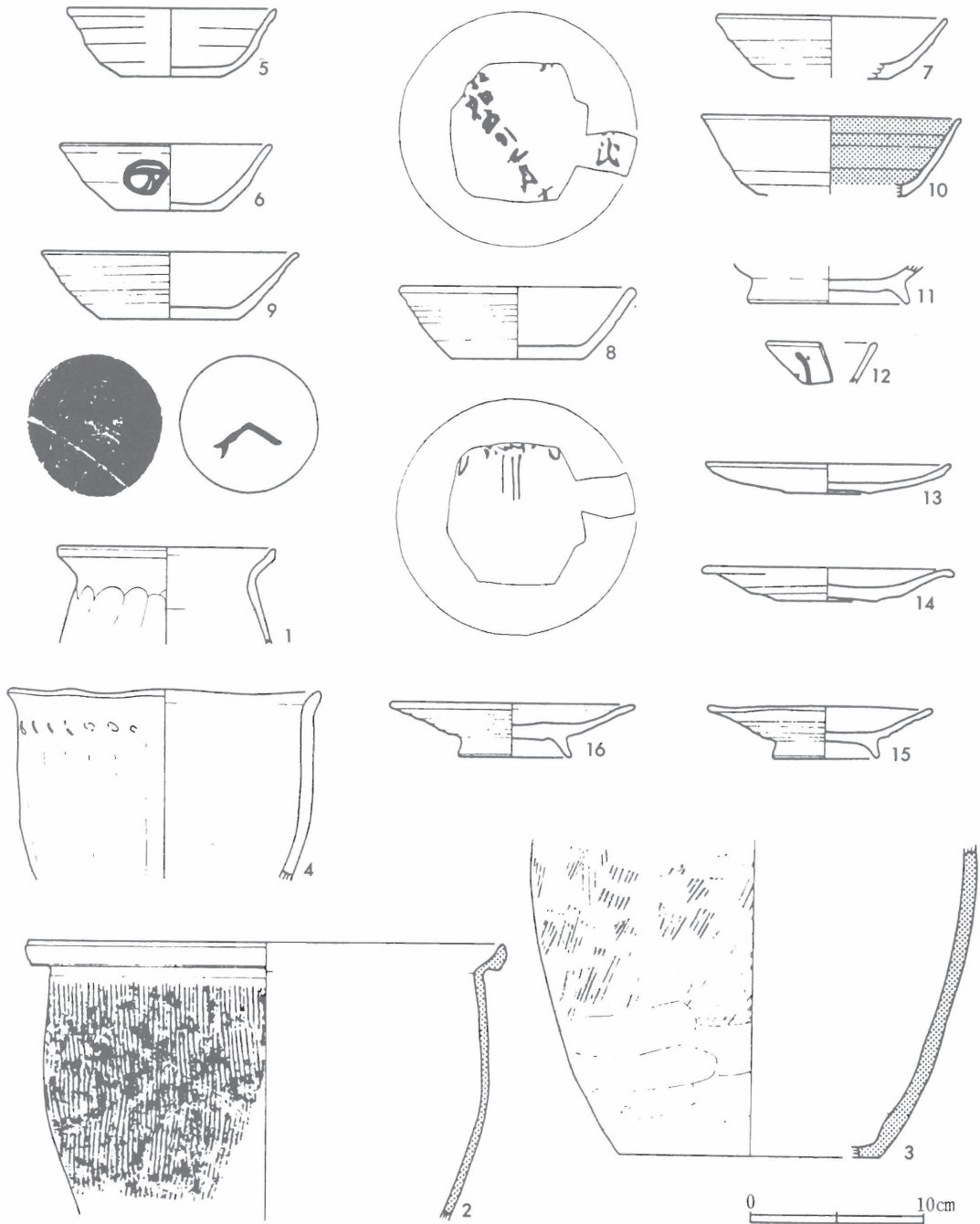
出土文字資料研究の課題のひとつでもあるが、土器に文字を記載する場合、土器の焼成以前に刻んだ「へら書き」以外は、いったいいつ文字を記載するのか、という素朴な疑問をよく話題にする。あきらかに別筆で、複数の文字を記載した例は、いくつかの遺跡で確認されている。また、重ね書きの例も多数ある。この事実は、土器に文字を記載するという行為が、必ずしも一過性のものばかりではないことを示唆している。

ただし、この3例の墨書土器のように、年月日を記載し、何らかの祭祀行為に関わる墨書土器は、その土器を使用した祭祀行為の年月日を記載したものと考えるのは早計であろうか。

もしこの仮定が成り立つなら、考古学の基礎作業のひとつでもある土器編年作業で、明確な暦年代を確定できる基準資料のひとつとなる。千葉県では現在まで、土器などに記載された文字資料は、10,000点を超える膨大な資料があるものの¹⁴⁾、木簡や漆紙文書などの出土文字資料に関しては、まったく史料がきわめて少ない。年月日を記載した土器が、それらの完全な補完となるとは、史資料性の違いから言えないが、当面のあいだ、土器編年作業については、この3例の資料は、編年の定點をおさえる意味できわめて有効なものであると確信している。



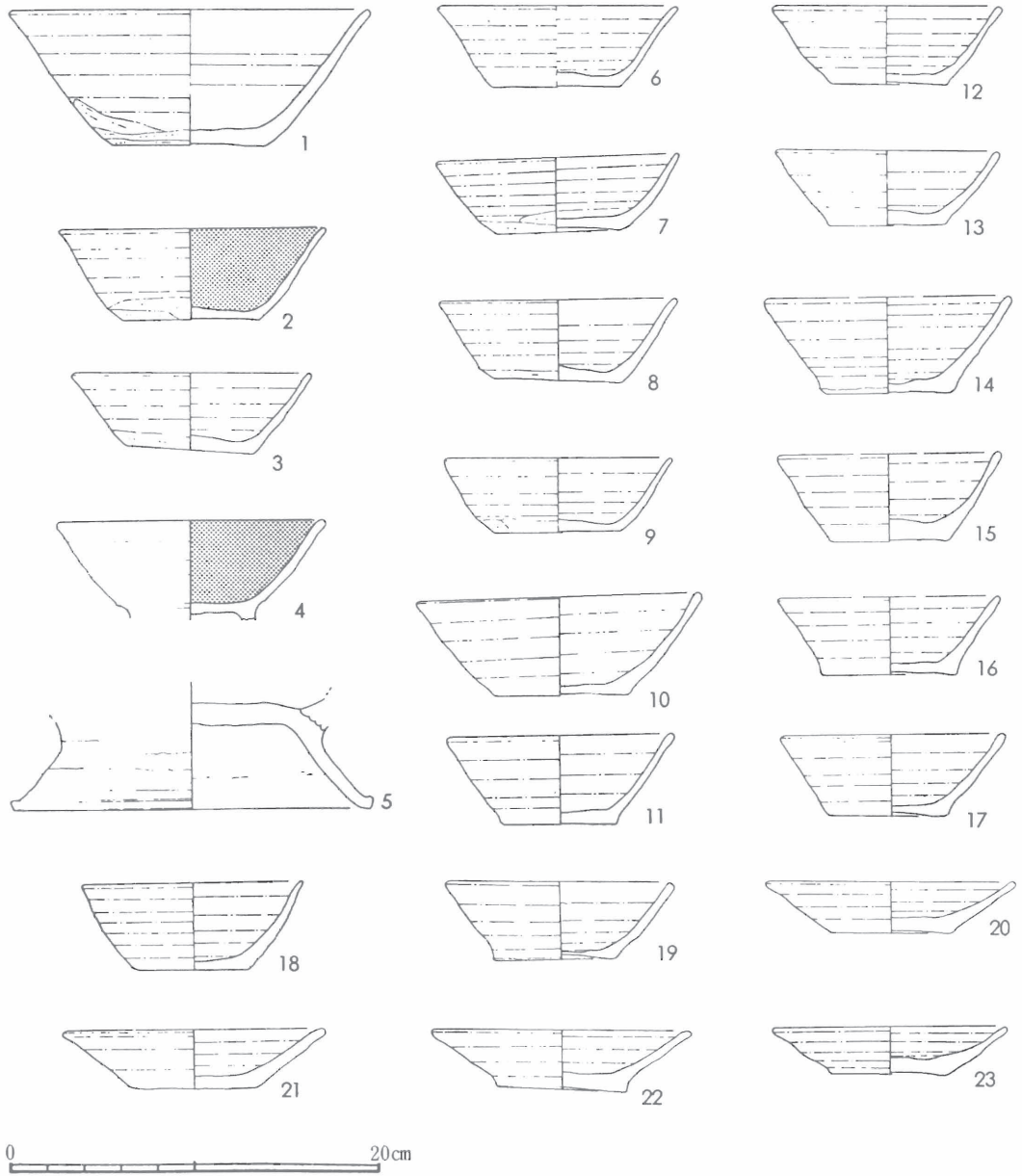
第1図 鳴神山遺跡II 004出土遺物



第2図 八千代市北海道遺跡D048号遺構出土遺物
 (注7文献より改図、遺物番号は出典のまま)

ただし、ひとつの土器の墨書時期の同時性については、字形あるいは筆跡など多面的な追認が必要である。この3例についても、その問題については、今後の課題となる。

また、墨書をする時期と土器の生産あるいは使用の時期との年代幅についても、今後とも検討していきたい。現在のところは、奈良・平安時代に関しては、千葉県土器編年の年代幅は1世紀を



第3図 市原市稲荷台遺跡E地点37号住居跡出土遺物
 (注8文献より改図、遺物番号は出典のまま)

25年単位で割ったものが作成されているため、その年代幅をもたせるのであれば、全く問題はないと考える。

さらに、土器そのものの産地などについても、少なくとも鳴神山遺跡例の土器については、ほかにみついている大量の土器とは、特殊な文字内

容を記載した墨書であるということ以外に、特に異質なものである¹⁵⁾。

そこで、3例の年月日をまとめると、次のとおりとなる。

弘仁九年九月廿カ (818年)

印西市鳴神山遺跡例

承和五年二月十カ (838年)

八千代市北海道遺跡例

貞観十七年十一月廿四日 (875年)

市原市稲荷台遺跡E地点例

奈良・平安時代の土器編年については、房総歴史考古学研究会主催の1987年シンポジウム¹⁶⁾以来、部分的な補足作業が行われ¹⁷⁾、大枠として認められたものと考えている。そのなかで房総での地域性やさまざまな搬入土器との共伴性など、より細かな問題提起ができるようになってきた。

そこで、鳴神山遺跡からみつかった年月日が記載された墨書土器をひとつの定点とし、この土器がみつかった竪穴建物の出土土器について考えたい。これに関しては、船穂郷の隣郷となる¹⁸⁾村神郷に属する、八千代市萱田遺跡群における近年の研究結果¹⁹⁾が参考となる。

このなかで、藤岡孝司氏の一連の研究²⁰⁾によると、萱田遺跡群歴史時代土器編年(以後、萱田編年とする)のIV期に杯型土器IX b類とした内面黒色処理をした碗の出現、V期に皿形土器の出現という器種構成上での大きな画期を提示している。そして、先にあげた「承和五年二月十カ□」と記載された土器から、V期を9世紀第II四半世紀とし、IV期をその前段階(9世紀第I四半世紀)と位置づけた。

そこで、器種構成という点から鳴神山遺跡II004竪穴建物の出土遺物を検討してみた。第1図に示したとおり、供膳形態では、皿はなくロクロ土器の杯及び非ロクロの杯(碗)という器種構成である。このことは、図化できないほかの小破片全部を確認しても、皿と断定できる土器がなかったことから、さらに補強できる。また、小破片のため図化できなかったが、萱田編年IV期に出現する内面黒色処理の杯型土器IX b類(碗)と考えられる土器片は存在する。

ちなみに9は、非ロクロの小型土器であるが、体部から口縁部の内面に、明瞭な油煙が2か所遺存している。またその油煙の痕跡部分の口縁部を、いずれもわずかに打ち欠いている。油煙の痕跡は、明らかに灯心を使用した結果であり、この土器は灯明具である。おそらく杯・碗類の転用品ではなく、灯明専用の土器であろう。

いずれにしても、鳴神山遺跡II004の出土遺物は、9世紀第I四半世紀の良好な基準資料となること

から、今後、鳴神山遺跡全体での細かな土器編年作業を行うことにより、村神郷と同じ様相となるのか、そうだとすればその画期は村神郷だけのことではなく、隣郷の船穂郷を含めた広範囲での画期であることが確立できそうである。

鳴神山遺跡の土器編年全体については、まさにこれからのことであるため、今回は基準資料のひとつの提示と問題提起としたい。

電神とその祭祀

竪穴建物の竈内での祭祀については、従来から多くの研究成果がある。特に奈良・平安時代では具体的な祭祀行為が判明してきていることも、近年の考古資料の充実の結果である。

現在までの成果を要約すると、竈の廃棄の過程と密接に関わり、例えば土器を倒位に置き、竈の封鎖を行うという行為として捉えられること²¹⁾。良好な事例として、佐原市馬場遺跡004号住居跡例のように、複数の杯を倒位に置き、一番上の杯の体部外面に、倒位で「上」の墨書がされることや、芝山町庄作遺跡例では「電神」と墨書した土器から電神の存在が明確となり、一連の行為が電神を封じ込める祭祀であることなどである²²⁾。

鳴神山遺跡においても、上記のような電祭祀に関わる事例は多数みることができ。そこで問題にしたいところは以下の点である。

電祭祀の類例が鳴神山遺跡全体で、かなりの数になるという事実から、電祭祀を行う竪穴建物の時期や遺跡内での位置はどうか。さらに素朴な疑問であるが、同じような竈を持つ竪穴建物なのに、電祭祀を行っているものと行っていない(明瞭な痕跡を残していない)ものとの違いが何なのか。竈を含めた竪穴建物の解体と電神の封じ込めという行為は、竈の解体場所と関係があるのか。以上のような点である。

そこで、まず鳴神山遺跡でよくみられる電祭祀について触れたい。

第4図は、鳴神山遺跡II004の遺構実測図である。先に提示した「弘仁九年九月[廿カ]」の年月日を記載した墨書土器がみつかった竪穴建物でもある。(写真1はII021竪穴建物の竈)

電祭祀以外にも、いくつかの点で興味あるので、竈実測図以外にも遺構実測図全体を掲載した。

まず、竪穴建物の支柱穴の位置である。P1～P

4が主柱穴であり、竈側及び出入り口側の、いずれも壁溝内や壁面に掘っている。特に出入り口側の2本は、掘り方が壁面からはみ出している。主柱穴がこのようなタイプの竪穴建物、鳴神山遺跡ではほかにも複数存在する²³⁾。また、P2内の底面には、正位で完形の杯が出土した。第1図の7がその土器である。P2は柱の抜き取り痕跡は認められず、特異な出土状況である。

さらにこの建物は、北西側でほかの竪穴建物と重複しているが、II004のほうが新しい。その重複する部分にのみ、壁柱穴をほぼ均等に配置する。このことから建設時に地盤の弱い箇所を把握して、壁の擁護をより強化したと考えられる²⁴⁾。II004の構築者たちは、古い建物跡が存在していたことを知っていたのだろうか。あるいは建築の際、その部分の地盤が弱いことに気が付いたのだろうか。きわめて興味深い。

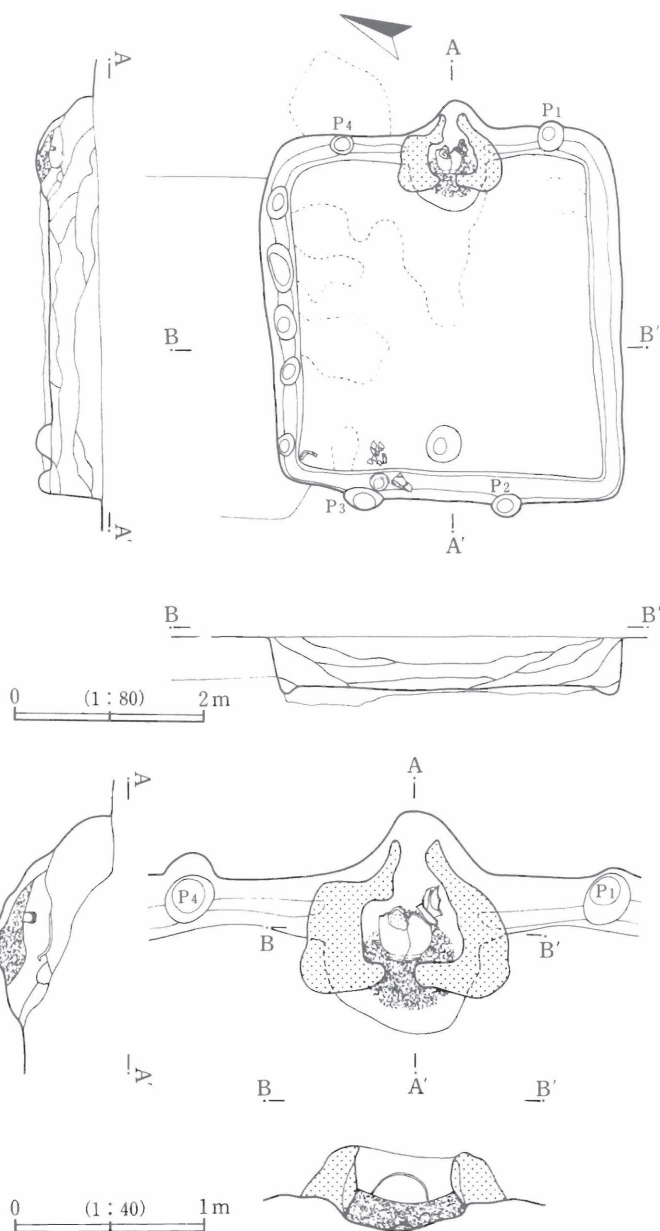
さて、本題の竈祭祀に触れたい。

竈については、竈前面（前天井+袖部前面+焚き口部）部分を解体している。ただこの建物に関しては、完全に竈前面を解体したのではないようである。そして、火床部の燃焼上層に小型甕を倒位で置き、その上に杯を1枚、それ以外に小型甕や杯の底部破片をいずれも倒位に積み重ねていた。さらにその上部に大型の甕を、倒位気味に横倒して、覆うように被せていた。一番下の小型甕を含めて、いずれも火床部から浮いた状態で出土していることから、この伏せられた土器すべてが、竈祭祀に関わるものであると判断した。

鳴神山遺跡では、このように小型甕を倒位にし、土器破片を積み重ねるといったタイプの竈祭祀の例を多く認めることができる。

ただ、土器片の積み重ねなどの例としては、「支脚の高さ調整²⁵⁾」などを行っている事例もあるため、竈祭祀なのか、支脚の高さ調整なのかの判断は、その出土状況や遺物の被熱痕跡などを十分に検討する必要がある。

また鳴神山遺跡では、小型甕以外にも杯を倒位で重ねる例や、支脚を倒位にしている例(写真2)などもあり、封じ込めるということから、「モノ」を倒位にするという行為を、竈の祭祀行為としている可能性もある。いずれにしても、ひとつの遺跡内でのパターン化をまとめる良好な情報のひとつであろう。



第4図 鳴神山遺跡II004竪穴建物

つぎに、竈の解体と竈祭祀との関係について、現段階での考えをまとめておきたい。

奈良・平安時代に限れば、竪穴建物内の竈については、そのほとんどが解体により、竈前面（前天井+袖部前面+焚き口部）を壊している。

それでいながら、竈神を封じ込めるために、土器などを倒位で置くという行為を行っている。これらの行為は、一見矛盾しているようでもあるが、竈を解体することと祭祀行為を行うことは、密接



写真1 竈祭祀と竈の解体



写真2 竈内に倒位で立つ支脚

な関係がありそうである²⁶⁾。

現段階では、全体の資料を綿密に検討はしていないが、竈祭祀の原位置を保っている事例は多数あるので、本報告時にはデータを提示したい。

現段階での想定であるが、竈祭祀の位置は、竈中央ではなく火床部最奥に位置し、煙道口の下の

壁（牀壁）に近い部分にある。このことは竈神が、煙道口を通過して煙道から外へ出ないようにとの願いであろうか。

また典型的な竈祭祀が、煙道口下（牀壁）に近い火床部の最奥に位置するということは、竈前面を解体しているにも関わらず、竈神が竈前面から

外へ出るとは意識していないと考えられる。このことは、竪穴建物の廃棄状態の想定にも関連する。すなわち竈前面には、竈を含めて竪穴建物を解体した時か、もしくは竈祭祀時に、竪穴の外部と内部を遮断するものが存在したのではなかろうか。その典型的なものが建物の埋め戻し土ではないだろうか²⁷⁾。

竈祭祀に関しては、鳴神山遺跡での事例が豊富である。本報告まで、できるだけ実態に迫ってみたいと考える。

「井戸状遺構」の祭祀

房総地域の台地上の平坦面からみつかる、いわゆる「井戸状遺構」については、低地や河岸段丘などの微高地に所在する「井戸」とは異なり、湧水地点まで掘り抜いている例は、きわめて少ないと考えられる²⁸⁾。このため遺構の機能や性格の決定には慎重な検討が必要である。

台地上の「井戸状遺構」に関して、鳴神山遺跡II040井戸とした遺構から、大量の土器とおそらく馬と考えられる大型獣の顎骨・歯、さらに貝類などが、ある一定の層からみつかった。

第5図と写真3がこの遺構に関するものである。標高25mほどの台地上の平坦面に位置し、弥生時代の竪穴建物や、この遺構より新しい溝と重複しているが、遺構の遺存は良好である。大きさや形

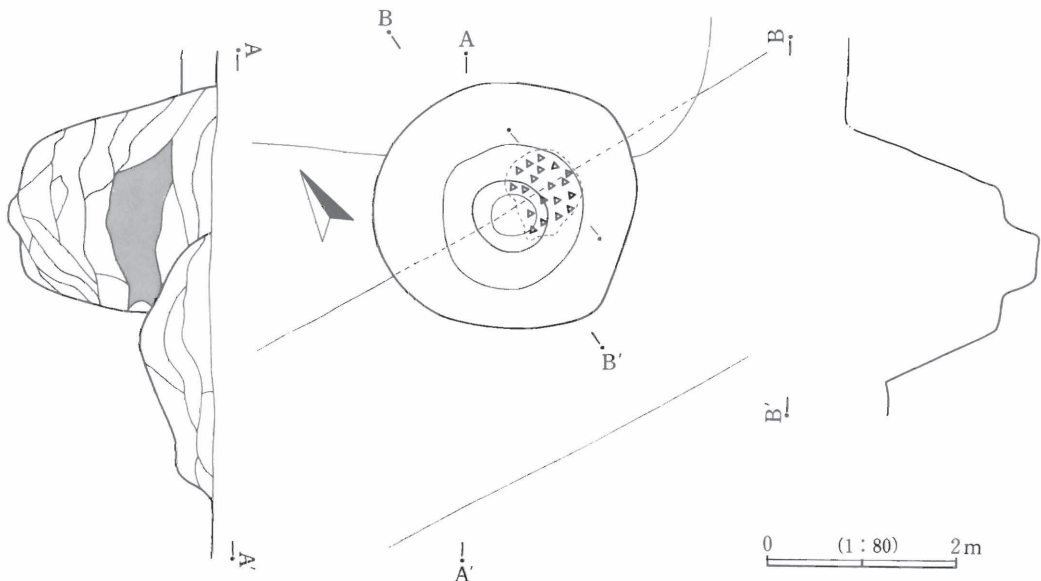
状は典型的な形をしており、平面形が整った円形、断面形がいわゆる「漏斗状」である²⁹⁾。深さは遺構確認面から2.1mほどである。埋め土の状態を観察した結果、中程までを人為的に埋め戻している。遺物は、その埋め戻し後の層から大量に出土しており、第5図の断面の網掛け部分に集中している。その一番下に馬と考えられる大型獣の顎骨部分と歯、その上に大量の土器類、さらにその上に貝ブロックの順番である。

獣骨の同定や貝の組成などの分析はこれから行う予定であるため、詳細については今後にゆだねるが、獣骨については埋葬や死後の処分ではなく、顎骨や歯などの部分的なものであることが最大の特徴と考えたい。

土器については時期的には8世紀末から9世紀前半で、一時期とは言えない。一括出土なのか層位的に分かれるのかは、現段階ではまだ未確認である。器種は杯・椀・皿、土師器の高盤（内面黒色処理）、大型の鉢と甕類・瓶類など多種である。文字資料には、墨書土器で「大国玉罪³⁰⁾」、「富」、「依」、「高」、「+」がある。

では、この遺構と出土遺物はどのように解釈できるだろうか。

遺構が形態的に「井戸」状であることは間違いない。底面にも段がつき、本来の井戸底施設と同様の形状でもある。根本的に異なるのは、湧水が



第5図 鳴神山遺跡II040井戸状遺構



写真3 「井戸状遺構」の祭祀遺物

ないことである。このことは「水を求める」ことを本来の目的とする「井戸」からすれば、致命的なことである。ただし「溜め井」的な機能が考えられなくもない³¹⁾。

出土した遺物のうち、獣骨についてはおそらく犠牲的な要素が考えられる。「大国玉罪」の墨書土器があることも、その根拠のひとつである。

この墨書土器は、全体の約3分の2程度の遺存であるが、残念ながら「罪」以下の部分が欠損している。文字は体部外面に横位で記載される。「罪」以下にも複数の文字が記載されていた可能性は高い。ただし残存部位から、体部外面を全周するようには書かれていないようである。文字内容の意味については、これから検討を重ねていくが、「大国玉」とは、鳴神山遺跡でもほかに事例のある「大国玉神」であり、国神そのものである。また内面黒色処理した土師器の高盤は、村の通常の食器としては異質でもある。

これらのことから、「井戸状遺構」の周辺で何らかの祭祀を行い、この遺構のなかに、まず大型獣の頭部を投げ込み、続いて祭祀に使用した道具を投棄していることが想定できる。その祭祀は国神に関わる祭祀であり、おそらく戸の祭祀ではなくて、村単位の祭祀ではなかろうか。さらに遺構の特徴から、水に関わる神への祭祀である可能性も考えられる。

このことをまとめると、現段階では可能性であるが、鳴神山遺跡II040井戸については、擬製的な井戸であり、水に関わる国神への祭祀のために存在したものではなかろうか。

上記のようないわゆる「井戸状遺構」で、遺構の形状や出土遺物なども含めて、きわめて近似する事例がいくつか存在する。例えば市川市内で3例。須和田遺跡第4地点、須和田遺跡第6地点、市営総合運動場内遺跡の3か所である³²⁾。この3例は下総国府、国分寺・尼寺にきわめて近い位置にある³³⁾。特に須和田遺跡については同様な遺構を2例確認しており、相互の関連はきわめて興味深い。本遺跡例と併せて、今後検討してみたい。

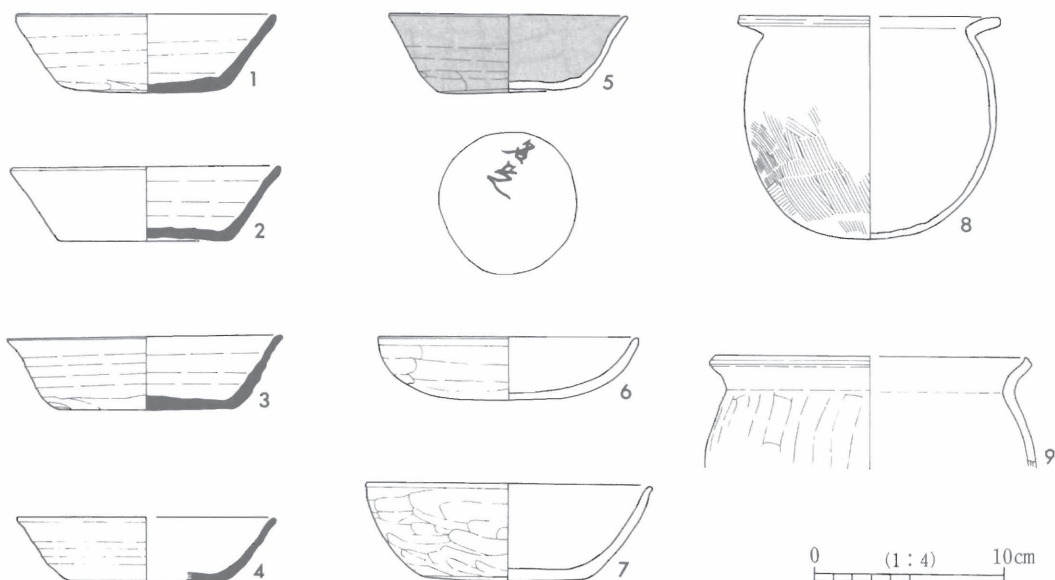
遠方からの搬入土器

鳴神山遺跡でみつかった土器で、特に遠方から搬入されたものを取り上げたい。ちなみに現在まで、土器については、須恵器は圧倒的な量比で常陸産（特に新治窯跡群）が多く、つぎに千葉市域産（中原・宇津志野窯跡）が特に煮沸形態で多く、ほかには北武蔵産（比企窯跡群）、上総産（永田窯跡）、下野産³⁴⁾、東海地方産などをわずかに確認した。もちろん現段階では産地が不明なものも相当数ある。施釉陶器については、三彩陶器、緑釉陶器、灰釉陶器があるが、猿投窯産や東濃産の灰釉陶器が多く、三彩・緑釉陶器はわずかである。





第 5 图 晴神山遺跡全体图 (1:2,000)



第7図 鳴神山遺跡 I 048号跡出土遺物

ここで紹介するのは、それ以外に搬入された土師器である。第7図の8を代表例として掲げた。鳴神山遺跡048堅穴建物の出土遺物である。

8は都城の土器名称でいう「甕A」である。口縁部の形態、体部から底部の調整方法（刷毛目）、丸底の底部、胎土の特徴から在地産の甕ではないことは明確である。共存する須恵器杯は新治産で、ほかには内外面赤色塗彩の土師器杯、非クロロ土師器の杯類などがある。これらは8世紀第III四半世紀のものである。

「甕A」の産地については、畿内周辺であろうという予測を持っている。今後産地に赴き、同定したい。さらに、鳴神山遺跡からは「甕A」と断定できる土器が、ほかの遺構からもいくつかみつがっている。ただし、プロポーションや胎土、体部などの調整方法の違いから、1か所の産地に比定することはできない。これも予測となるが、伊勢地方か尾張地方も含めた産地ではないかと考えている。

ところで、いわゆる「畿内産土師器」については、林部均氏の一連の研究³⁵⁾により、地方への搬入はきわめて限られた器種構成であること、地域により搬入される時期にいくつかの画期があることなどが明らかになった。さらに、林部氏は東日本について、律令国家の東国支配の特質の現れであ

るという見解も提示している³⁶⁾。

現在のところ、鳴神山遺跡からみつかった「甕A」は、林部氏のいう「畿内産土師器」の器種構成には含まれない。しかし鳴神山遺跡では、器種が「甕A」ばかりであることも、また事実である。

みつかった土器のすべてが畿内周辺ではないとは考えているが、今まで「畿内産土師器」=杯・碗類などの供膳形態のみが目立っていたが、このような器種もあるという前提で、ほかでの類例を求めたい。また、「甕A」の出土の背景になにがあるのか、併せて探ってみたい。

まとめ

再度、強調しておきたい。鳴神山遺跡で提示した着目点は、この遺跡での特殊な例ではない。複数とか多数とかの類例のひとつとして、今回提示するものが多い。このことは、特に村落内の祭祀についても同様である。この点について、古代村落の祭祀に関する、特に動物との関わりとの観点で同様な指摘もある³⁷⁾。

また最近、報告書や一般の歴史書のなかで、集落跡の復元想像図のたぐいを目にする。そのほとんどが、復元した建物群の鳥瞰図であることも、また気になることのひとつである。

遺跡全体の復元鳥瞰図は、確かに魅力的であり、

遺跡の紹介をする場合、わかりやすい方法であることは間違いのないのだろうが、復元鳥瞰図に至るまでには、もう少し、ひとつひとつの遺構のディテールを復元してみる必要はないのだろうか。

近年の発掘調査では、遺跡からみつかる情報が多岐多量にわたることは周知のことであるが、復元鳥瞰図において、みつかった情報の何%を活かしているのか、少なからず疑問が残る。

だからこそ、当面はいろんな遺跡でさまざまなディテールの復元作業を行い、その集大成として、代表的な遺跡の復元鳥瞰図が完成できれば、より説得力のある復元作業となり得るのではなかろうか。

以上、本研究ノートとして、整理作業の進捗のなかで気になることを羅列した。

鳴神山遺跡の整理作業は、今後も本格的に進め

ていくことになるが、より確かな事例を少しずつ増やして、「東国古代村落の復元」作業の大きな目標のため、「助走」³⁸⁾から、「加速」状態とし、「ラストスパート」できればと考える。

最後になったが、本研究ノートの執筆にあたり、鳴神山遺跡の調査担当者の郷堀英司氏には、日頃からさまざまな教示を得ている。また出土文字資料に関しては国立歴史民俗博物館の平川南氏に、竈構造に関することを谷匂氏に、昨年度、鳴神山遺跡の整理作業に携わってくれた立和名明美さんには、遠方からの搬入土器に関して教示を得た。この場でお礼を述べます。さらに、いつも自説をまとめるにあたり、難しい話題にお付き合いいただいている、北部調査事務所印西調査室の内勤補助員の皆さんたちにもお礼を述べます。

注1) 鳴神山遺跡については、これまでに下記でその成果の一部を公表している。

郷堀英司 1994 「鳴神山遺跡群出土の文字資料」『研究連絡誌』第40号 (財)千葉県文化財センター

2) 遺跡の性格がごく一般的という意味ではなく、あくまでも調査例としての一般性である。念のため。

3) 竈の構造に関する名称は、谷匂氏のご教示による。谷匂 1995 「カマド再考」『研究紀要16 -20周年記念論集-』 (財)千葉県文化財センター

4) この墨書土器の釈文は、注1文献で「□弘ヵ仁九年九月一」と読んだが、その後、平川南氏のご教示により、「一」を「廿」とした。

5) 本遺跡では、一般的に「竪穴住居跡」とか「竪穴住居」として扱ってきた遺構を、「竪穴建物」としてとらえ、単に住居として扱うのではなく、他の遺構(例えば掘立建物・柵列・溝・井戸など)と同系列に扱う。そして居住空間としての「戸」を復元するうえで、ほかの遺構と共通素材にしている。なお用語の命名は、関和彦氏による。

関和彦 1991 「山村と漁村」『日本村落史講座2 景観1』 雄山閣出版

渡辺修一 1992 「「竪穴住居」か「竪穴建物」か」『研究連絡誌』第34号 (財)千葉県文化財センター

6) この2例以外に、佐原市吉原三王遺跡で、年月日を記載した可能性のあるいくつかの墨書土器がある。「□香取郡大坏郷中臣人成女替承□□年四月十日」など。この「承□□年」が「承和」である可能性は高いが、年も不明であるため、今回は省く。

栗田則久他 1990 『佐原市吉原三王遺跡-東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書V(佐原地区2)-』 (財)千葉県文化財センター

7) 阪田正一他 1985 『八千代市北海道遺跡-萱田地区埋蔵文化財調査報告書II-』 (財)千葉県文化

財センター なお、遺構の名称は報告書による。

8) 浅利幸一 1983 「市原市稻荷台遺跡出土の紀年銘墨書土器」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』 史館同人・市立市川考古博物館 遺構の名称は、やはり同文献による。

9) 平川南 1990 「庄作遺跡出土の墨書土器」『千葉県芝山町 小原子遺跡群』 山武考古学研究所

10) 阪田正一 1983 「八千代市権現後出土の墨書人面土器について」『千葉史学』第2号

11) 房総風土記の丘 1995 『平成7年度企画展展示図録 住まいと集落』 この企画展に関連して、外部研究員として展覧会の企画を行った際に、本資料を実見する機会を得た。

12) 注8の 浅利(1983) 文献による

13) 笹生衛 「第6章 古代の信仰」『房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』 (財)千葉県文化財センター

14) 平成3年度から、千葉県史料研究財団で千葉県史古代史資料編の刊行に伴い、県内で出土した文字資料を資料収集及び資料化した。

15) 八千代市北海道遺跡例については、「形態分類上はやや特異なタイプとして捉えられる」としている。

藤岡孝司 1990 「八千代市萱田地区遺跡群の歴史時代土器」『研究連絡誌』第30号 (財)千葉県文化財センター

16) 房総歴史考古学研究会 1987 『房総における歴史時代土器の研究』

17) 例えば 注15)の藤岡(1990) 文献である。

18) 船徳郷の郷域については、下記の文献で、南を八千代市と印西市の市境となる神崎川、西を同じく神崎川南岸の船橋市最北部である小室・小野田・車方・大神保・鈴身・豊富町地区、北を印旛郡白井町、印西市船尾地区と推定している。しかし北限について

- は、印西市千葉ニュータウン内での現在までの調査成果から、印西市戸神・多々羅田・大塚地区あたりまでとしたい。なお東隈については印西市結縁寺・松崎地区周辺は確実であるものの、まだ不明な点もある。
- 宮原武夫 1991 「第5章 奈良時代の船橋」『船橋市史 原始・古代・中世編』船橋市
- 19) 天野努 1984 「下総国印旛郡村神郷とその故地」『研究紀要10』(財)千葉県文化財センター
平川南・天野努・黒田正典 1989 「古代集落と墨書土器—千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館
鬼頭清明 1989 「郷・村・集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館
大野康男 1991 「古代集落としての白幡前遺跡」『八千代市白幡前遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書V—』(財)千葉県文化財センター
藤岡孝司 1991 「古代東国村落の分析(1)—千葉県八千代市萱田地区遺跡群と墨書土器—」『相武考古学研究所研究紀要』第2集 相武考古学研究所
藤岡孝司 1992 「古代東国村落の分析(2)—千葉県八千代市萱田地区遺跡の生産構造—」『相武考古学研究所研究紀要』第3集 相武考古学研究所
天野努 1995 「古代東国村落と集落遺跡—下総国印旛郡村神郷の様相—」『研究紀要16—20周年記念論集—』(財)千葉県文化財センター
藤岡孝司 1996 「古代東国村落の構造—中核集落と衛星集落—」『古代』第101号 早稲田大学考古学会
萱田地区の研究成果についてはこれ以外にもまだあるが、総合的な研究のみを掲げた。
- 20) 注15の藤岡(1990)文献、注19の藤岡(1991)・(1992)・(1996)文献などによる。
- 21) 堤隆 1995 「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会
- 22) 注9の平川(1990)文献
- 23) 鳴神山遺跡以外の類型について、現在資料収集中。
- 24) このような事例は、平成元年度に筆者が調査を担当した東金市妙経遺跡でも類例があった。
糸川道行 1994 『東金市妙経遺跡・井戸谷9号墳—房総導水路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書III—』(財)千葉県文化財センター
- 25) 1993年11月28日に開催された、山梨県考古学協会秋季大会シンポジウム「発掘が語る古代竪穴住居の様相」討論の席上での、パネラーの桐生直彦氏のコメントによる。
桐生直彦他 1995 「第10回秋季大会 討論編」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会
- 26) 注21の、堤(1995)文献でも指摘している。
- 27) 現在の竪穴建物の発掘調査の手順では、建物本体と竈の部分とを別々に調査している例が多いが、この想定を証明を行うためには、自省も込めて、建物本体の埋め土と竈の埋め土とを同時に観察できるような調査方法が必要であろう。
- 28) 西山太郎 1995 「井戸—千葉県内の発掘調査例を参考として—」『研究連絡誌』第44号 (財)千葉県文化財センター
- 29) 「漏斗状」の名称は、注28の西山(1995)文献による。なお、井戸の部分名称については、下記文献も参考とした。
駒見和夫 1992 「井戸をめぐる祭祀—地域の事例の検討から—」『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会
- 30) 本資料は、注1の郷堀(1994)文献で、出土遺構を、鳴神山遺跡II040住居跡と記載しているが、住居跡は誤りで、「井戸状遺構」である。
- 31) 台地上の「井戸状遺構」の例から、発掘調査に従事し始めたころ、先輩諸氏にご教示をうけたことがある。しかし水を溜めることがどんなに大変なことか、あるいは雨水などで貯水があったにせよ、千葉県の場合、どれだけ早く引いてしまうか。未だに素朴な疑問でもある。
- 32) 宮内勝已他 1992 『須和田遺跡第6地点』市川市教育委員会
宮内勝已 1996 「井戸状遺構」について(上)『史館』第28号 史館同人
- 33) 下総国府については、市川市国府台に所在する和洋女子大学周辺とする説が有力である。現在、大学内において、キャンパス再開発に伴い発掘調査が行われており、区画溝と考えられる溝や掘立柱建物などがみつまっている。
和洋学園校地埋蔵文化財調査室 1995 『国府台遺跡(和洋学園キャンパス内テニスコート地区)現地説明会資料』
- 34) 郷堀英司氏のご教示による。ただし、常陸国北部の堀ノ内竈跡群周辺も含めた可能性があるとのこと。
- 35) 林部均 1986 「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号 日本考古学会
林部均 1992a 「律令国家と畿内産土師器—飛鳥・奈良時代の東日本と西日本—」『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会
林部均 1992b 「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会
- 36) 注35の、林部(1992a)文献による
- 37) 荒木敏夫 1991 「古代の祭りと遊び」『日本村落史講座6 生活I』雄山閣出版
- 38) 注1の、郷堀(1994)文献